

稚蠶期の簡易飼育法に関する試験及調査成績

第一報 防乾紙使用稚蠶齡中一回條桑育に関する試験

地方技官 堀 口 宣 之
 “ 小 林 幸 雄
 農林技手補 菊 地 資 美

1. 緒 言

箱飼、濕布育、防乾紙育等の稚蠶簡易飼育法は何れも蚕兒の生理を基調として創案され、従來行われて居つた乾燥育の稚蠶期の桑不足の弊を根本的に覆した劃期的な飼育法であつて、一面其副産物として、労力の節減を図り得ることもあげ得る。就中防乾紙育は操作上の点に於て最も簡便であるので、この飼育は殆んど全国的に行われ、その普及率は非常に大である。蓋し防乾紙育が養蚕業界に齎した効果は極めて盡大なるものである。

而して本飼育の給桑形態は初め剉桑剉芽であつたが、漸次全芽全葉條桑と変化し、給桑回数は減じ、齡中一回育を見るに至つたのである。即ち長野縣蚕業試験場の文化育、新パラフィン紙育片倉桑業試験所の新昭和育等があり、齡中一回育としては片倉蚕業試験所の昭和育、板木縣蚕業試験場の新進育、福島縣蚕業試験場の包み育、本場の防乾條桑齡中一回育等が出現したのである。併しなから給桑回数の少い方法は兎角簡易なる字義的解釈にとられ、主として労力を節減する方法なりと見る向があり、特に齡中一回育に於てはその傾向があるので、それらが果して多少なりとも非生理的飼育であるか否かを明らかにする必要があると思ふ。若しこれ等の簡易飼育法が普通育又は多回数の防乾紙育に比し、絶対に遜色なく優秀な成果を収められるとしたならば、そこに多大の労力節減がみられ、養蚕農家の受ける利点は頗る大なるものであろう。此の意味に於て當場に於ては昭和十八年以降四年間防乾紙による簡易飼育法試験、及桑葉の萎凋状態調査をなし、尙昭和二十年に於ては東日本の各縣蚕業試験場に剉桑、剉芽による方法と全芽、全葉、條桑によるものとの比較試験成績を照会し、集計調査も併せて施行したのである。試験区中包み育は福島縣蚕業試験場佐野氏の考案せる方法によるもので、防乾紙稚蠶齡中一回條桑育は昭和十八年堀口が創案したるものである。

2. 飼育法試験

本縣に於ては普通養蚕の稚蚕飼育法として春蚕全芽一日二回育、防乾齡中一回條桑育、秋蚕全葉三回育を採用しているが、交雜種についてはその他幾多の方法をも加えて比較試験をしたのである。

A 昭和十八年度交雜種に関する試験

(1) 試験方法

(イ) 試験時期 春蚕 掃立月日 5月25日

(ロ) 供試蚕品種 支108号×日115号

(ハ) 供試蟻量 一区 2瓦

(ニ) 試験区

全芽育 (1~2齡) 一日二回全芽防乾紙育、(3齡) 半防乾紙育、全芽一日三回

(4~5齡) 全芽一日四回

一日一回條桑育 (1~2齡) 一日一回條桑防乾紙育 (3~齡5) 前区と全じ

齡中一回條桑育 (1~2齡) 齡中一回條桑防乾紙育 (上二枚、下一枚) (3齡)

齡中二回、條桑防乾紙育 (上一枚、下一枚) (4~5齡) 條桑一日三回

深箱育 (1~2齡) 齡中一回全芽育、(3齡) 半防乾紙育、全芽一日三回、(4~5

齡) 全芽一日四回

(2) 試験成績

第一表 蚕兒飼育成績

試験区	経過日数	減蚕歩合	対掃立蚕一万頭 上繭收量	繭一類		繭層歩合
				全繭重	繭層重	
全芽育	日時 26.18	41.3%	瓦 11 055	瓦 2.07	瓦 41	20.00%
一日一回條桑育	26 22	28.0	14.192	2 06	41	20.00
齡中一回條桑育	26 02	13.9	18.884	2 26	48	21.25
深箱飼	26 22	32.6	13.472	2 15	43	20.00

第二表 繰絲試験成績

試験区	繰絲量	生絲量歩合	解舒絲長	繭絲織度	小類	解舒格
全芽育	25.2	13.54%	855米	2.71	95.0点	2等
一日一回條桑育	23.7	13.68	726	3.05	92.5	3
齡中一回條桑育	29.9	14.74	868	3.02	92.5	1
深箱育	23.4	13.65	760	2.92	93.5	2

以上の成績を見ると蚕兒飼育成績に於ては齡中一回育は各項目に於て他の三区に比し優り、全芽育、深箱飼は減蚕歩合多く、全芽育、一日一回條桑育は繭重、繭層重が少い。又繰絲成績に於ても齡中一回育は優れた成績を示している。

B 昭和十九年度交雜種に関する試験

(1) 試験方法

- (イ) 試験時期 春蚕 掃立月日 5月25日
 秋蚕 // 8月1日
 晩秋蚕 // 8月25日

- (ロ) 供試蚕品種 春蚕 { 日 115号(新) × 支 108号
 日 12号 }
 秋蚕 日 115号 × 支 108号
 晩秋蚕 支 108号 × 日 115号

- (ハ) 供試蠶量 一区 2瓦

(ニ) 試験区 (1~2齡)

- 全芽一日二回育 一日二回全芽、防乾紙育
 // 一日一回育 一日一回 // (蚕座下に補濕燒糠を敷く)
 條桑一日一回育 一日一回條桑、防乾紙育
 條桑齡中一回育A区 齡中一回條桑、防乾紙育(上二枚 下一枚) (3齡) 二回條桑
 防乾紙育(上下各一枚)
 // B区 //
 (3齡) 全芽三回、半防乾紙育
 包ミ育 齡中一回全芽、防乾紙包み育

全葉一日三回育 一日三回全葉、防乾紙育

〃 一回育 一日一回（蚕座下に補濕燒糠を敷く）

備考 條桑齡中一回育A区以外の各試験区は（3齡）半防乾紙育、（4~5齡）普通育

（2）試験成績

第三表

蚕期	試験区	経過日数			減蚕 歩合	対掃立蚕 一万頭 上繭收量	繭一顆		繭層 歩合	生絲量 歩合	繰絲量 (解舒格)
		1~2齡	3~5齡	全齡 (溫度)			全繭重	繭層重			
		日時	日時	日時	%	匁	瓦	廻	%	%	廻
春 蚕	全芽一日二回育	7.04	17.02	24.06 (24.2)	14.3	19.294	2.44	51	21.16	14.54	19.2 (4)
	〃 一日一回育	〃	〃	〃	15.0	18.840	2.40	49	20.80	14.40	24.2 (2)
	條桑一日一回育	〃	〃	〃	13.9	18.791	2.50	53	21.49	15.21	24.8 (2)
	條桑齡中一回育	〃	〃	〃	16.9	17.948	2.42	50	20.90	16.82	28.0 (2)
	包ミ育	〃	〃	〃	15.3	17.610	2.37	50	21.37	15.59	23.4 (3)
秋 蚕	全芽一日二回育	6.17	16.01	22.18 (25.3)	15.4	15.146	1.86	32	17.35	13.26	18.5 (4)
	〃 一日一回育	〃	〃	〃	14.6	15.154	1.88	32	17.24	14.13	18.4 (4)
	條桑一日一回育	〃	〃	〃	15.8	14.940	1.85	32	16.86	13.81	17.9 (4)
	條桑齡中一回育A区	6.06	15.21	22.03 (〃)	15.9	15.113	1.82	31	17.39	12.63	15.2 (5)
	〃 B区	〃	〃	〃	17.3	15.135	1.89	31	16.57	12.81	18.6 (4)
	包ミ育	6.17	16.01	22.18 (〃)	17.8	15.540	1.88	34	18.33	12.99	16.0 (4)
	全葉一日三回育	〃	〃	〃	15.8	15.353	1.79	31	17.56	12.44	17.9 (4)
〃 一日一回育	〃	〃	〃	14.5	16.605	1.84	31	16.77	13.18	18.7 (4)	
晚 秋 蚕	全芽一日二回育	7.17	18.02	25.19 (23.0)	32.3	9.649	1.78	33	18.89	14.79	19.0 (4)
	條桑齡中一回育A区	7.12	17.19	25.07 (〃)	30.9	10.826	1.76	32	19.30	16.02	21.1 (3)
	〃 B区	7.16	18.15	26.07 (〃)	32.6	9.413	1.72	34	18.89	14.48	21.4 (3)
	包ミ育	7.17	18.07	26.00 (〃)	44.8	8.426	1.77	32	18.25	13.57	20.3 (3)
	全葉一日三回育	7.17	18.11	26.04 (〃)	30.2	10.725	1.73	32	18.44	13.02	19.3 (4)

以上の成績を見ると春蚕に於ては條桑一日一回育飼育成績優り、繰絲成績に於ては條桑齡中一回育特に優れ、條桑一日一回育、全芽一日一回育も亦良好な成績を示している。又秋蚕に於ては

各区を通じ作柄は良好であつたが繰繰成績は氣象の影響を受けて何れも稍不良で、各試験区の間
に優劣を見出し難かつた。晩秋蚕に於ては包み育減蚕歩合多く、繰繰成績に於ては大差はないが
標準育である全芽一日二回、全葉一日三回育が稍劣つた成績を示している。

C 原種の齡中一回育に関する試験

原種は交雜種に比し一般に虫質が弱いというので、簡易飼育を躊躇する傾向があるが果して
左様なものであろうか。この点を明らかにするために本試験を施行したのである。

(1) 試験方法

(イ) 試験時期 昭和20年 春蚕 掃立月日 5月31日

昭和21年 // // 5月26日

(ロ) 供試蚕品種 両年共 日115号(新)、支108号(旧)

(ハ) 供試蟻量 一区 1瓦

(ニ) 試験区

條桑齡中一回育 (1~2齡) 齡中一回條桑、防乾紙育

全芽育 // 全芽二回、防乾紙育

(2) 試験成績

第四表

年 度	蚕 品 種	試 験 区	経 過 日 数			減 蚕 歩 合	健 蛹 歩 合	対掃立蚕 一万頭 上繭收量	繭 一 顆		繭 層 歩 合
			1~2齡	3~5齡	全 齡 (溫度)				全繭重	繭層重	
			日 時	日 時	日 時	%	%	疋	瓦	題	%
昭 和 二 十 年	日 二 五 号 新	全 芽 育	8.17	19.09	28 02 (23.2)	56.1	80	8 020	2.03	39	19.41
		條桑齡中一回育	//	//	//	44.3	86	9.830	1.96	40	20.93
	支 一 〇 八 号 旧	全 芽 育	7.03	18.08	25 11 (23.2)	18.2	94	16 205	2 20	43	20 05
		條桑齡中一回育	//	//	//	21.3	96	16.025	2.26	45	20.26
昭 和 二 十 一 年	日 二 五 号 新	全 芽 育	7.21	18.01	25.22 (24.1)	68.2	-	3.750	2 20	43	19.59
		條桑齡中一回育	//	//	//	68.8	-	3.710	2 22	43	19.40
	支 一 〇 八 号 旧	全 芽 育	7.09	16 21	24 06 (24.1)	25.9	-	11 976	2.37	47.5	20 37
		條桑齡中一回育	//	//	//	28.1	-	11.429	2.28	45	19.75

以上の成績を見ると、昭和二十年の成績に於ては両品種共齡中一回育が全芽育に比し、稍優れ

る成績を示している。又二十一年の成績に於ては硬化病が若干発生したため一般に成績は稍不良であつたが、支一〇八号（旧）に於て繭重並に繭層重が稍多い程度で、他に両試験区の間には差異を認めることは出来ない。

3. 防乾條桑齡中一回育飼育標準表

上記の試験に於て示した防乾條桑齡中一回育は本縣に於ては稚蚕飼育法の一つとして採用され縣下各地に於て本格的に或は試験的に飼育されているがその標準表を示せば次の如くである。

防乾稚蚕齡中一回條桑育飼育標準表 対卵量10瓦

第 1 齡 温度 F 78度 (眠中 77度) 差 5度 (差 5度)						第 3 齡 温度 76度 (眠中 75度) 差 5度 (差 5度)							
日 全 齡	順 齡 中	給 桑			面積 (箔数)	備 考	日 全 齡	順 齡 中	給 桑			面積 (箔数)	備 考
		時刻	量	型式					時刻	量	型式		
1	1	前10 12	15匁 700	對桑 條桑	6坪 (2箔)	呼出桑 條桑對 芽の割合 5割	8	1	後 3	貫匁 3.200	條桑	32坪 (8箔)	飼食細繩入條桑 對芽の割合 6割
2	2						9	2	前 8				起 除
3	3					場合により補桑 を要す 停食、拵座 眠座、乾燥 竣 蛻	10	3	前10	4.800	條桑	48 (12)	繩入 芽の割合同前 眠除 場合によ り午後補桑
4	4	前10			12 (4箔)		11	4	後 1			60 (12)	停食、拵座、 眠座、乾燥、 竣 蛻
5	5	前 8					12	5	前 4				
							13	6	前 7				
第 2 齡 温度 F 78度 (眠中 77度) 差 5度 (差 5度)						備 考 (1) 1. 2 齡に於ては下敷パラフィン紙は一枚にて可なるも覆パラフィン紙は1箔につき2枚使用のこと。 三齡に於ては下敷、覆とも1枚使用のこと。 (2) パラフィン紙の周囲は桑棒にて間隙なき様重すること。							
日 全 齡	順 齡 中	給 桑			面積							備 考	
5	1	前 8	貫匁 1.800	條桑	16坪 (4箔)	飼食細繩入條桑 對芽割合5割5分							
6	2	前 8				起 除							
7	3	後 5			32 (8)	場合により午前 中補桑、停食、 拵座、眠座、乾燥 竣 蛻							
8	4	後 3											

4. 桑葉の萎凋状態調査

A 全芽の萎凋状態調査

本調査は主として一日一回、二回給桑の飼育法に於ける桑葉の萎凋状態を知るために施行した

ものである。

(1) 調査方法

- (イ) 調査期日 第一回 昭和19年5月30日、第二回 同年6月3日
 (ロ) 供試桑葉 桑品種 赤市平 全芽
 (ハ) 試験区、調査方法 対照区(無被覆)防乾紙区、二枚パラフィン紙区
 補濕燒糠防乾紙区

以上試験区の蚕座上に桑葉100瓦を1尺坪に拡げ、夫々の覆いをなし7時間、12時間、24時間後に於ける桑葉の萎凋状態を調査した。

(2) 調査成績

第六表

試 験 区	第 1 回 調 査				第 2 回 調 査			
	午前9時	7時間後	12時間後	24時間後	午前9時	7時間後	12時間後	24時間後
対 照 区	100 ^瓦	70	63	42	100 ^瓦	76	70	55
防 乾 紙 区	100	82	75	64	100	85	82	68
二 枚 防 乾 紙 区	100	87	76	72	100	88	85	75
補 濕 燒 糠 防 乾 紙 区	100	94	92	89	100	92	92	87
平 均 温 湿 度	23.6°C 67%				24°C 75%			

上表に於て萎凋度の遅きものより順記すれば補濕燒糠防乾紙区、二枚防乾紙区、防乾紙区、対照区である。又萎凋の程度を見ると一晝夜後に於ても尙飼料價値ありと認められるものは補濕燒糠防乾紙区である。但し二枚防乾紙使用の齡中一回育は後の萎凋状態調査にある如く、一度に多量の桑葉を給與するものであるから萎凋状態に大なる差異があることは勿論である。

B 齡中一回育蚕座内に於ける桑葉の萎凋状態調査

本調査は主として齡中一回育である防乾條桑齡中一回育蚕座内に於ける給與桑の萎凋状態を知るために行つたものであるが、対照として包み育の型式である包み紙、その他の試験区についても調査をしたのである。

(1) 調査方法

- (イ) 調査時期 第一回、昭和19年8月2日、第二回 同年8月6日
 (ロ) 供試桑葉 嶺品種 改良鼠返 全芽育成したるもの

(ハ) 試験区

條桑二枚防乾紙区 防乾條桑齡中一回育の要領で條桑を置いたもの、覆い防乾紙二枚、下防乾紙一枚

條桑一枚防乾紙区 上と全様なるも、覆防乾紙一枚

全芽包み紙区 全芽を包み育の要領で防乾紙にて包みたるもの

全芽防乾紙区 全芽を普通防乾紙育の状態に置いたもの

(ニ) 調査方法 初めに芽つきの状態同様の條桑四区をとり、その中二区は速やかに全芽を摘みとり、それを全芽の二試験とした。この際この二区の全芽量の極く僅かの差は補充をして同量としたのである。而して條桑供用の二区は1.5尺坪に條桑175匁を給桑と同様の型式に並べ、全芽の二区は0.8尺坪に全芽を給桑の要領にて並べ二晝夜後、三晝夜後、三晝夜六時間後（第一回のみ）の桑葉の萎凋状態を調査した。而して最後の秤量後直ちに條桑区は速やかに全芽を摘みとり、その全芽を秤量し萎凋度を算出したのである。

(2) 調査成績

第七表

第 一 回	試 験 区	午前10時	2晝夜後	3晝夜後	3晝夜6時間後	3晝夜6時間後 全芽の萎凋度	平均温湿度
	條桑二枚防乾紙区	175	151	142	136 (全芽量108)	83.7%	26.9 C 81%
條桑一枚防乾紙区	175	145	133	125 (全芽量98匁)	76.0	〃	
全芽包み紙区	129	116 (89.9%)	108 (83.7%)	107	82.9	〃	
全芽防乾紙区	129	110 (85.3%)	100 (77.5%)	97	75.2	〃	
第 二 回	試 験 区	午前10時	2晝夜後	3晝夜後		3晝夜後に 於ける全芽 の萎凋度	平均温湿度
	條桑二枚防乾紙区	175	150	144 (全芽量116匁)		84.7%	25.6 C 86%
條桑一枚防乾紙区	175	145	136 (全芽量104匁)		75.9	〃	
全芽包み紙区	137	122 (89.1%)	117		85.4	〃	
全芽防乾紙区	137	113 (82.5%)	106		77.4	〃	

上記の成績を見ると第一回と第二回とに於て若干異なる数字を示したが、両者を平均すれば萎凋の遅いのは條桑二枚防乾紙区及全芽包み紙区で條桑一枚区と全芽防乾紙区は前二者に比し可な

り距りがあるようであり、この状態から見ても前二者が齡中一回育が可能であることが分る。

5. 東北地區本飼育法共通試験成績

昭和二十二年度に於て東北地区の研究機関で共通試験を行つたが、其の成績の概要は次の如くである。

(1) 春蚕 (蚕絲試福島、飯坂、新庄各支場 縣試、青森、山形、宮城、福島、岩手各場平均)

飼育法	経過日数	減蚕歩合	対掃立一万頭收繭量	上繭一顆重	繭層歩合	生絲歩合	絲質格	解舒格	蚕品種
齡中一回育	日時 27.23	% 22.1	4.098匁	瓦 2.18	19.58	14.38	等 1	等 1.6	× N91 × 日115号 N58 × 支108号
全芽育	28.08	23.4	3.995	2.09	19.50	14.48	1.3	2.3	

備考 繭絲成績は福島支場及青森、山形、岩手の平均

(2) 初秋蚕 (縣試、宮城、福島、岩手、平均)

飼育法	経過日数	減蚕歩合	対掃立一万頭收繭量	上繭一顆重	繭層歩合	生糸歩合	糸質格	解舒格	蚕品種
齡中一回育	日時 23.03	% 33.42	3.017匁	瓦 1.89	% 18.84	% 13.98	優	2	× 日115号 × 梁白 支108号 × 支川
全芽育	23.03	29.63	3.080	1.93	19.12	14.44	1	3	× 日115号 支108号

備考 繭絲成績は岩手蚕試のみである。

以上を見ると春蚕期に於ては何れの点でも齡中一回條桑か優り、秋蚕期に於ては一縣の成績が齡中一回育が相当の開きを以て悪く、他の二縣の成績は齡中一回育か優つて居る。従つて平均成績が一縣の爲に支配されて悪くなつて居る。

6. 東日本各縣蠶業試験場稚蠶

簡易飼育法比較調査成績

本場に於ては曩に夏秋蚕作柄改善に関する調査を行ひ、稚蚕期の簡易飼育法が普通育に比し劣らざることを知つたのであるが、昭和二十年には岐阜縣以東の各縣蠶業試験場に最近に於ける對芽(葉)、全芽(葉)、條桑育の比較試験成績を照会し、その成績を集計して平均を求めてみた。その成績を示せば次の通りである。

試験区 判…判芽又は判桑、全…全芽又は全葉育、條…條桑育

第八表 其の一 蚕兒飼育成績

試験項目 蚕期	試験区	経過日数			減蚕歩合			対掃立蚕一万頭上繭収量			上繭一立顆数			全繭重			繭層重			繭層歩合			
		判	全	條	判	全	條	判	全	條	判	全	條	判	全	條	判	全	條	判	全	條	
春蚕	平均成績	日時 29.15	29.16	29.18	% 21.2	19.4	19.3	13.736	13.285	13.995	86.89	88	瓦 2.02	2.05	2.09	40.39	40	19%	19.	18.	.68	06	95
	例数	8	8	8	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	
秋蚕	平均成績	22.09	22.14	22.06	23.6	22.7	27.1	11.257	11.224	10.669	97.96	96	1.73	1.73	1.72	32.32	32	18.	18.	18.	32	24	36
	例数	8	8	8	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	

第九表 其の二 繰絲試験成績

試験項目 蚕期	試験区	繭絲長			繭絲織度			解舒絲長			解舒絲量			生絲量歩合			小類		
		判	全	條	判	全	條	判	全	條	判	全	條	判	全	條	判	全	條
春蚕	平均成績	米 986	978	992	デニール 2.86	2.77	2.84	米 794	790	783	應 27.7	27.9	27.5	% 15.09	14.93	15.01	点 90.6	91.1	90.3
	例数	8	8	8	8	8	8	8	8	8	6	6	6	8	8	8	8	8	8
秋蚕	平均成績	908	911	934	2.65	2.68	2.68	681	704	726	20.2	20.5	20.7	14.06	14.34	14.27	88.7	88.1	89.3
	例数	8	8	8	8	8	8	7	7	7	7	7	7	9	9	9	6	6	6

上の成績を見ると、虫繭質、收繭量に於ては三区間大なる差異はないが、春蚕は條桑育、秋蚕は全芽育、判芽(桑)育僅かによい成績である。又繰絲成績に於ては春蚕は三区大同小異であり、秋蚕は條桑育と全芽(葉)育が僅かによい成績を示してゐる。

7. 總括及考察

昭和十八年より昭和二十一年に至る四ケ年に亘る稚蚕期のパラフィン紙による簡易飼育法に関する試験及調査の結果を摘要すれば次の如くである。

(1) 交雑種の飼育試験は四回行はれたが総合すると虫繭質、收繭量に於ては各試験区間大差はないが、繰絲成績に於ては概して給桑回数(葉)の少い飼育法である防乾條桑齡中一回育、條桑一日一回育、全芽(全葉)一日一回育が優れる傾向がある。

(2) 原種の飼育に於ては防乾條桑齡中一回育と全芽育の間に於て蚕兒飼育成績は大同小異であ

るが、第一回は前者が稍優り、第二回は後者が僅かに優れる成績を得た。

- (3) 全芽の萎凋調査に於ては補濕燒糠防乾紙区、二枚防乾紙区、防乾紙区の順に萎凋度が遅く、一晝夜後に於ける萎凋度は補濕防乾紙平均成績88%で、その桑葉は尙飼料價値があることを示してゐる。齡中一回育蚕座内に於ける桑葉の萎凋状態調査に於ては齡中一回育形態の條桑二枚防乾紙区及全芽包紙区は各々その対照区に比べて萎凋度遅く、三晝夜後に於ける全芽の萎凋度は平均成績に於て兩者共84%強であつて齡中一回育が可能であることを裏書してゐる。
- (4) 東日本各縣蚕業試験場の稚蚕判芽(桑)、全芽(全葉)、條桑育の比較試験成績を集計したところ、三者間の成績の差は僅少であるが飼育成績に於て春蚕は條桑育、秋蚕は全芽育、判芽育繰繰成績に於ては秋蚕條桑育と全芽育がよい成績を示し、簡易飼育法が従來の判芽(桑)育に比し同等或は同等以上であることが明らかにされた。

以上の試験及調査の成績より稚蚕期の防乾紙による種々なる簡易飼育法は何れも實用價値あるものと認められるのであるが、特に防乾條桑齡中一回育、及各一日一回育が普通防乾紙育に比し、優るとも劣らざることが分明されたのであつて、これ等の飼育法が主として労力の節減を図るものであるとされたる概念は是正されなければならなくなつたのである。而してかやうな飼育法に於ては給與桑の萎凋防止を完全にはかることが絶対の條件であり、又給桑回数が少いため、蚕座面積は正確に、給桑量は絶対不足なきやう留意すべきことは勿論であるが、この点防乾條桑齡中一回育は体積に於て相当餘裕があり、従つて操作も比較的簡單であるので実施も容易であると思う。要は防乾紙育法の種類の如何をとはないのであつて、更に生理的な労力を節減し得る方法が案出、実施されることが望ましいのである。